
初めての音

T・E

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めての音

【Nコード】

N99250

【作者名】

T・E

【あらすじ】

ハローキティといっしょ！のリオと猫村いろはのSSを書いています。

公式のストーリーで浮かぶキャラ像とはかなり違いが出ています。でもこんなリオもありかなと思って書いてます。

気分を害された方はごめんなさい。

いろはと出会った日

今日は寒い一日になりそうだ。
目が覚めてまずそう思った。

今は何時頃だろうか？

1日中カーテンを締め切っている部屋では時間の流れが掴みづらい。

冷蔵庫に向かいミネラルウォーターを口に含む。
今日も私の一日が始まる。

ギターにヘッドフォンを付けて音を奏でます。

自分が出した音だけは信じられる。
それ以外は駄目だ。
簡単に裏切ってしまうような奴ばかりだ。
でも彼らは決して私を裏切らない。

お腹が空いた。
少し休憩してから家を出よう。

ギターとアンプを担いでいつもの場所に向かう。
外に出てみると日はすっかり落ちていた。

途中にあるコンビニに寄って水とおにぎりを買う。
歩きながらおにぎりを食べる。水を飲む。
毎日が単調だ。
何も変わらない。

ほとんど人が通らない、寂れた裏道に着いた。
ここがいつもの場所。
ここなら誰も来ることはないだろう。
実際、今まで誰も通ったことはない。

ギターにアンプを繋ぐ。
壁を背にして座り込む。
目を閉じる。
私だけの時間が始まる。

『歌、上手いね!!』

誰かに話し掛けられた。
私だけの時間は消え去った。

目を開けると、目の前には同じ年くらいの少女がいた。
日も出てないのに日傘をさしている。
何かキャラがあらわれた派手な日傘がかなり印象的だ。

無視して家に帰ろう。

『待ってよ！実は迷っちゃってこの路地から出られないんだけど、
助けてくれないかな！？』

まあ、確かにこの道はかなり複雑だ。
慣れていないかぎり迷わず帰るのは至難の業だろう。
でも私には関係ない。
そのまま歩き始めた。

『ちょ、ちょっと本気！？普通無視して帰ったりするかな！？あ！

！なるほどね。あなたに着いていけばこの道を抜けれるってわけね
『！』

うるさい女だ。

少し歩くペースを早めよう。

一刻も早くこの女から離れたい。

出口に着いた。

これで解放される。

『そうそうこっから入ったんだった！ありがとう！！そうそう、あなたいつもあそこでギター弾いてるよね？前から気になってたの！何処からか聞こえる綺麗な歌声とロックなギター！！んで調べてたら迷っちゃったんだよね。』

後ろで少女が騒いでる。

今日は疲れた。

人に話し掛けられるだけで億劫なのに。

一番苦手なタイプに絡まれるなんて付いてない。

『あなたの名前は何ていうの？私はいろは、猫村いろはっていうの。』

』

答える気はない。

『ちょっと！名前くらい教えてくれないじゃない！！言わないと放さないぞ！！！！』

肩をつかまれている。

振りほどくのも面倒だ。

というより、思ったよりも力強く捕まれている、ギターとアンプを抱えたままでは振りほどけそうにもない。

名前くらい教えてもいいか。

『リオ。』

『リオ？わかったよ！今日はありがとねリオ！！つてもうこんな時間！？急いで帰らなきゃ！また今度ね！！』

こっちは二度とごめんだ。

自由奔放過ぎる。

腕時計を確認するなり駆けていった。
門限に厳しい家庭なのかもしれない。
まあどうでもいいか。

家に着いた。

いつもと少し違った1日が終わろうとしている。
シャワーで全身を軽くさっと流す。
ギターを抱いてソファに横たわる。

また父親は酒に酔って私を殴る。
母親は止めようとしめない。
自分の身をかばうので精一杯のようだ。
また拳が私を襲う……。

いつの間にか意識を失っていたようだ。
父親は酔い潰れて眠っている。
今日も疲れた。

母親は何事もなかったかのように洗い物をしている。

いつものことだし仕方ないか。
いつの間にかこんな日々慣れてしまった自分がいた。

また嫌な夢を見た。

今日は最悪な気分だ。

ギターに落ちていた涙の粒を拭う。

涙を流す必要があったかな？

今の私には何も関係ないじゃないか。

また私の1日が始まる。

二日目

今日もいつもと同じ場所に行く。

昨日は散々な目にあったが、今日は大丈夫だろう。

さあ始めよう。準備はできた。
自分だけの時間が

『おっ！今日もやるんだね！！最初から聞けそうで良かったよ！！』

冗談じゃない。
何でこの女がいるんだ？

『あれ？始めないの？人がいたら出来ないの？』

当たり前だ。

人に聞かせるために弾いているわけじゃない。
家で思い切り歌ったら隣人に聞かれてしまう。
それを避けるためにわざわざこんな場所まで足を延ばしているんだから。

今日はもう家に帰ろう。

『ちょっと！！せっかく楽しみにしてたんだから一曲くらい弾いて
つてよ！！』

嫌だ。

『あなた人付き合い下手でしょ！！何！？そんな態度がかっこいい
とでも思ってるわけ！？』

そんなことはない。

まあ人付き合いが苦手なのは否定できないが。

誰かと楽しく話したりする自分を想像できない。

愛想笑いを返すくらいなら出来るかもしれないが。

『何か用でもあるわけ?』

そう言って笑顔を作ってやった。

これで満足してほしい。

これ以上近づかないでほしい。

『さっきから言ってる通りよ!一曲くらい弾いていきなさいよ!』

本当に自分勝手な女だ。

他人の都合はお構いなしなのか?

『今日は何か喉の調子が悪いから。』

笑って返す。

『今日はまだ歌ってないじゃない!いつものでいいから歌いなさいよ!』

『ごめんなさい。また今度。』

ごめんなさい。もう二度と会いたくない。

本音はこうだった。

伝わることはないだろうが。

咳き込む真似を一応しておく。

『本当に喉痛いの？なら、また今度聞かせてもらおうわ。あ、これのど飴だからあげるわね。じゃあまた今度。』

少女の姿が見えなくなった。

手には無理矢理押しつけられたのど飴が一袋ある。

何故か罪悪感を感じていた。

今日もまた違った1日を過ごした。

久しぶりに人とまともに接したような気がする。

また今日もシャワーを浴びる。
そこでふと思ひ立ち、鏡にお湯をかける。

自分の顔を見るのは久しぶりだ。
ちよつと疲れているように見える。
鏡の自分に笑いかけてみる。

？

鏡の自分が笑いを返さない？

ああ。

私は笑いかたすら忘れたのか。

あの時自分はこんな顔をしながらあの少女と話していたのか。

指で無理矢理頬を押し上げて笑顔を作ってみた。
指を放して維持してみる。

薄っぺらな作り笑いが顔に貼りつく。
この感触を忘れないようにしよう。

ソファに疲れた身体を預ける。
ギターを抱く。

いつから私はギターを抱いて寝るのが癖になったのだろうか？

家に帰るのが億劫だった。

その日もあてもなくぶらぶら歩いていた。

音楽が聞こえてきた。

済んだ歌声と素人の耳にも格別に聞こえるギターの音。

気付けば吸い込まれるように人の群れに紛れていた。

周りにはたくさんのファンであると思われる人たちがいた。

緑の髪の少女が歌っていた。
楽しそうに歌っていた。

見ているこちらまで明るくなるようだった。

釘付けになった。

毎日見に行った。

決して手に届かない存在に思われた。

自分にはないものを持ち過ぎている。

まるで……。

……………。

また昔の夢を見た。

あの女に会ってから嫌なことばかりだ。

今日はあの路地のもっと奥にいこう。

絶対に誰も来ない所まで行こう。

三目

いつもより早めに家を出る。

一人きりで音楽を奏でるために。

今日こそ誰にも邪魔をされないために。

空にはまだ太陽が残っている。

夕焼け空とでもいうのだろうか。

オレンジ色の空は本当に久しぶりに見る。

思えば、この街に来てからはずっと太陽を見ていなかった。

私の日常が変わってしまった。

いつもの場所をずっと奥まで歩いた。
何度も道を曲がった。

もうここでもいいか。

本当に静かな場所だ。

私一人しかない。

今度こそ誰も来ないだろう。

そつと目を閉じて音の流れに沈んでいく。

父親が死んだ。

急だった。

何でもトラックに弾かれて即死だったとか。酒の買い出しに行った
帰りに死んだ。

何というかある意味父らしかった。

父親が死ぬとすぐに母親は私を追い出した。

私がいると色々と迷惑らしい。

三百万円が入った封筒を渡された。

これで今後生きていけ、と。

無一文で家を出されるより幾分ましだ。

変なところだけ母らしい母だった。

迷わずギターとアンプ、ヘッドフォンなどその他色々必要なものを買った。

知らず知らずのうちに緑の髪の少女に憧れている自分がいたのだろう。

いや、正確に言うなら『音楽に魅せられてしまった』という言葉の方が正しいのか。

いずれが理由にせよ私はギターを買った。

今使ってるギターはその時からの友人だ。

彼女のライブを見る。

眠るまでギターを弾く。

これが私の日常だった。

たった2つ。

2つの言葉だけで私の全てを表すことができた。

まあ、ギターしか残っていない今の私よりはましかもしれない。

今は音楽が私の全てとなっている。

『今日でみなさんとはお別れです。』

緑の髪の少女はそう言った。

何でもデビューのきっかけを掴んだらしい。

最後の挨拶はいやにさばさばしていたと思う。

それにしても突然消えてしまっただな。

お門違いだろうが裏切られたようにも感じた。

あんまりだと思った。

私が1つ消えた。

ただ、今ならわかる。

結局は彼女も音楽に魅せられていたのだろう。

当時彼女の周りにできた人ばかりは、結局のところ彼女にとっては無価値なものだったのだろう。

彼女が笑っていたのは自分の音に酔っていただけなのだ。

その街にいる意味をなくした。

かといって行くあてもない。

ただその街からは出たかった。

少し離れた街に安い部屋を見つけた。

そこが今住んでいる場所。

そこを借りることにした。

ギターを弾く以外は生きている実感もない。
そんな毎日。

音に溺れている毎日。

音に酔い自分を傷つける毎日。

やはり親子は似るものだ。

おかしいな。

いつもなら何もわからなくなるのに。

今日は上手く入り込んでいけない。

最近見る夢のせいか過去の映像ばかりが頭をよぎる。

しかし薄い人生だ。

たったこれだけの回想が終われば思い出すことはもう何もない。

目を開けよう。

今日はもう帰ろう。

『終わりかな？今日はいつもと違う感じだったね。』

いつからいたのか。

あの少女が目の前にいる。

『場所勝手に変えないでよ！また迷っちゃったじゃない！！』

何で自分の都合を押しつけてくるのか。

そんなこと知らない。

自業自得じゃないか。

『またあなたに着いていくからね。さっさと片付けて歩きなさい！』

いちいち癪に障る。

わざと違う道を歩いてやろうか？

まあそんなことをしても時間の無駄か。

あれ？

そろそろ出口に着かないとおかしいのに。

『まだ出れないの？もしかして迷ってるんじゃないの？』

うるさい。

笑いながら話し掛けるな。

『おっ！あの道は通った覚えがあるぞ！！向こうに行けばいいような気がする！！』

この女は何でも感覚で済ましているのではないだろうか？

そうでなければこんな人間にはならないだろう。

駆け出した女の背中を見てそう思う。

『……と思ったけど違ったみたい。』

ざまあみろ。

あの女がうなだれている。
新鮮で気分がいい。

『笑うな!』

？

私が笑っているのか？

作り笑いさえ満足に出来ていなかったのに？

頬に手をあててみる。

確かに口角が上がっている。

昨日の感覚とほぼ同じ。

だが何かが違う。

カシャッと音がした。

音の方向に目を向けてみると携帯があつた。

『いや、よく考えてみたら、あんたが笑ってるのってレアなんじゃないかなって思ったの！見たい？』

見た……くはないか別に。

『笑ってた方が可愛いじゃない！いつもその顔キープしとけば嫌でも人が寄ってくるわ！！』

そう言って笑うこの少女の顔はまぶしく見える。
この笑い方は誰かに似ていないか？

ああそうか。

記憶の中の緑の髪の少女に似ているような気がする。
見ているこっちまで温かくなるような笑顔。
何故そんな顔ができる？

『あなたは……何故そんな風に笑っているの？何か可笑しいことでもあった？』

自然と話し掛けてしまっていた。
自分から話し掛けたのはいつ以来だろうか。

『別に？ただ笑うのにいちいち理由なんか必要かな？』

『そんなものなの？』

『そんなもんよ。それに深く考える必要もないわ。人間は笑顔が一番なんだから！』

何だそれは。
求めてもない答えはいらない。

『だいぶ遅くなっちゃった。こりゃ母さんに叱られるかな……。』

少女にとってさっきの会話はもう終わったもののようにだ。
また別のものに関心を移している。
せわしない。

少し落ち着いたらいいのに。

『取り敢えずさっさと歩きましょう！そのうち出口にも着くでしょう！』

結局その後はスムーズに出口まで歩けた。

『やっと出れたわ……。明日もやるならいつもの場所にいなさいよ！』

そう言って少女は帰っていく。

私も帰ろう。

彼女の家とは正反対の方向にある家へ。

今日は風呂を沸かすことにする。

ほとんどシャワーだったから随分と久しぶりに感じる。

湯ぶねに浸かりながらあの少女のことについて考える。

彼女は私が持っていない全てを持っているのではないか？

温かく包んでくれる家族がいて、温かくなるような笑顔を持っている。

彼女のことが羨ましくないとはいえない。

明日もいつもの場所へ行こう。

ただ彼女の言葉に従うのだけはしゃくだ。

今日行った場所の近くで音楽を奏でよう。

どうせ明日も聞きに来るのだろう。

今日みたいに黙っててくれれば別に構わないか。

人に私が奏でた音を聞かれたくはない。

それは今でも変わらない。

だがあの少女なら別にいいような気がした。

他の人たちとあの少女の違いは一体何なのか。

今日も1日が終わる。

四日目以降

『本当、毎日聞いても飽きないわ！天才なんじゃない？』

目を開けるとやはり少女がいた。

『てかまた変な場所に来てるわね。帰りにまた迷いたいわけ？』

『あなたに会いたくないだけ。』

『ひどいこと言うわ。そんなに嫌なら別の場所でやればいいじゃない。』

『そうするとあなたに負けたみたいで嫌なの。』

口ではそう言ったが、私はわからない。
人が来ない場所ならまだ別にある。

なのにどうしていつもここに来るのだろうか。
本当にわからない。

『また明日ね。』

拒んでも来るのだろう。
拒否権はなさそうだ。
そこら辺がこの少女らしい。

今日も音を奏でる。
昨日とはまた少し違った場所で。

目を開ければやはり少女がいる。

今日も音を奏でる。

昨日とはまた少し違った場所で。

それでも目を開ければやはり少女がいる。

今日もまた……。

いつの頃からかいろはもギターを持ってくるようになった。

私と一緒に弾きたくて買ったらしい。

一緒に弾く……か。

いつも一人でギターを弾いていた記憶しかない。

どんなものなのか。

少し楽しみだ。

早く上手くなってほしい。

いつも私の演奏が終わった後に少しだけ聞いてあげる。

さすがに上手いとは言えなかったが、彼女には才能があると思う。
すぐに上手くなるだろう。実際、聞くたびに上手くなっている。

思えば。

自分じゃない他の誰かに優しい気持ちを向けるのは初めてのことが
もしれない。

もちろん向けられたことも初めてだ。

いろはには色々なことを教わった。

いつものように目を開ける。

珍しい。

今日はいろはがいない。

そんな日もあるのか。

少し悲しいと思ってる自分がいる。

『ありゃ、今日は終わっちゃったか。探し物してたらかなり時間食っちゃった。』

いろはが来た。

足音が聞こえた瞬間。

声が聞こえた瞬間私の顔がほころぶ。

あれ？

今日のいろはの顔は曇っていないか？

心なしか浮かない顔をしているような気がする。

いつもの笑顔と少し違う。

『何て言うか……。言いにくいんだけどさ……。』

『何？』

何故だろう。

いろはの言葉を聞きたくない。

聞いてはいけない気がする。

『私、引越すことになったみたい。』

『……え？』

今何と言った？

まさか冗談だろう。

そんな三流ドラマのような話が現実にあるものか。

『ちょっと前から知ってたんだけど、リオのことを考えるとなかなか言い出せなくてさ……。』

そんな困ったような顔で笑うな。

目に涙をためながら笑うな。

『また私が消えるのね。』

気付けばそうつぶやいていた。

突然。

本当に突然。

あの時も突然。大事なものが突然目の前から消える。

頬が熱い。

何かが伝っている。

『泣かないでよ！本当は私だって泣きたい……。』

涙か。

夢を見て涙を流すことはあったが。

だが起きてる間に流したのは一体いつ以来か。

気付けば暗い路地裏には2人の泣き声が溢れていた。

私が泣いているのは何故か。

いつか緑の髪の少女が消えた時は泣くことはなかったはずだ。
彼女とこの少女の違いは一体何なのだろうか？

それは簡単にわかる。

いつのまにかいろはを特別な存在だと思っていたからだ。

時には母親のように感じたいろは。

私が何処にしようと必ず見つけてくれる。

私がどんなに拒絶しても同じように接してくれる。

いつのまにか心を開かせてしまう。

世間一般に言う優しい母親。

まさにそんなイメージ。

そして友達のいろは。

私の音を聞いてくれる。

時にはからかってくる。

一緒にギターを弾きたいと初めて言われた。

私に色々な感情を教えてくれた。

今だってそうだ。

自分以上に大切な特別な存在。

いろはを言葉で表すならまさにしっくりくる表現だ。

そんな感情があるなんて、自分に芽生えるなんて思いもしなかった。

『あなたは……どうして泣いているの？』

聞かずにはいられない。

この少女が泣いている理由だけは本当にわからないから。

『……ただ悲しいから。やっと仲良くなれたのに別れるなんて辛いじゃない。』

そうか。

そんな簡単な理由なのか。

『……あなたは何でも深く考え過ぎよ。もっと簡単に笑ったり泣いたりしてもいいのよ。』

笑うことにも泣くことにもそんなに簡単な理由があればいいのか。

『……明日もやるんでしょう？』

『……多分ね。』

『……なら、明日こそはいつもの場所にいて。』

『……気が向いたらね。』

少女は反対の方向に帰っていく。
私も帰る。
足取りは重い。

家のドアを開ける。
荷物を置く。
ソファーに崩れこむ。

だが。
疲れ果てているのに眠れない。

色々な感情が心を渦巻いている。
こんなにたくさんの感情が自分にもあったのか。
生まれて初めての経験に頭がくらりとする。

明日は久しぶりにいつもの場所に行こう。
最後まで素直に接してやろう。
明日はもう泣きたくない。

最後の日

目が覚める。

今日は本格的に寒い一日になりそうだ。

正確な日付は知らないが、確か12月に入ってだいぶ経っていたはず。

寒いのも当然か。

今日でいろはとはお別れか……。

いつもの場所に行く前に少し寄り道をしようか。

いつもの場所に着いた。

いつもの場所と言いながらも来るのは少し久しぶりだ。

慣れないことはするもんじゃない。

かなり時間が掛かってしまった。

いろははまだ来ていないみたいだ。

先に着けて良かった。

ギターをアンプに繋ぐ。
準備はできた。

あとはいろはが来れば始められる。
少し待っておこう。

『待っててくれたんだ！リオが気遣ってくれるなんて珍しいじゃない！！』

5分ほどしてからいろはが来た。

『別に待ってない。もう始めようかって時に偶然あなたが来ただけ。』

最後まで私は私。
素直になれない。

『んじゃ始めちゃってよ！』

静かにうなづく。
音を奏で始める。
ただ今日はいつもと違う。

今日は初めて人に音を聞かせることを念頭に置く。
目は閉じない。
目は開けたまま、いろはを見つめたまま音楽を奏でていく。

いろはも目を逸らさないで聞いてくれている。
ずっと見つめてくれている。
彼女は幸せそうに微笑んでいる。

いつのまにか私も笑っている。
自然な笑みがこぼれている。

そうか。
あの緑の髪の少女が笑っていた理由はこれか。
別に自分の音がどうかこうとかが理由じゃない。

人に音を聞かせる。

いや。

自分が奏でる音を聞いてくれる人がいる。

たったそれだけのことがこんなに嬉しいなんて。

なるほど。

人が笑うのにたいした理由は必要ないのか。

私の演奏が終わる。

まだ終わりたくないのに。

まだ一緒にいたいのに。

私の全てを彼女に伝えた。

私は何故もっとたくさんの音を出せないのか。

自分の技術不足を嘆く。

『……終わりだね。』

何も答えられない。

終わりだとは思いたくない。

『……えつとさ。』

『……何?』

『……ちよつとだけ聞いてくれるかな? まだ下手だし恥ずかしいけどね。』

そう言っているのはギターを構える。

そこから溢れだす音を詞を全てを心に刻み付けようと思う。
いろはは歌いだす。

『一緒にいたくて でもいらなくて

時はただ過ぎ去る 止まってはくれない

いつのまにかできた かけがえのないもの

失いたくないのに 離れ離れに』

何だろう。

胸が熱くなる。

『ねえどうして？ 最後は笑顔で別れたいのに
ねえどうして？ 涙が溢れだして止まらない』

いろはとの思い出が頭をよぎる。
色々な感情が混ざりあう。

『離れていても 2人は変わらない
共に過ごした思い出が2人を支える
だから泣かないで 私もあなたも 大丈夫だよいつかきつ
とまた会えるから』

こんな音楽もあるんだ。
また一ついろはに教わった。
音が胸を一杯にする。
歌詞が思い出を呼び起こす。

誰かが聞けば、月並みな歌詞とそこまで上手くない演奏だとしか感
じないかもしれない。
だが私には伝わってきた。
いろはの想いが痛いほど胸に突き刺さってきた。
気付けば涙が流れていた。

『……これで終わり。歌詞は引越すって分かってから少しずつ書いていったの。演奏はまだまだだったけど今までが一番良かったと思うな。……って泣かないでよ！歌詞にも書いてたじゃない！！リオが泣いちゃったら…私まで……泣いちゃうじゃない………。』

いつのまにこんな関係になったのだろうか。

最初は嫌っていたのに。

いろはは私の全てを変えた。

決まりきった日常を。

人の見方を。

薄っぺらかった人生を。

初めて大事な友達となってくれた。

『……もう一曲だけ聞いてくれるかな？』

気付けば私はまたギターを構えていた。

それ以外に溢れる気持ちを伝える方法を知らないから。

今度は目を閉じさせてもらう。

彼女を見ていたら泣いちゃいそうだから。

大丈夫だよな？

いろはなら全てわかってくれるよね？

私が弾いているとは思えない。

ギターからはこんなに優しい音も出るのか。

歌詞は浮かんできた詞をただ並べていくだけ。

随分と不恰好な歌詞だ。

それでも伝わっているはずだ。

どの詞にもいろはとの思い出を目一杯詰め込んでいるのだから。

音を奏でている途中一度だけ薄目を開けてみた。

いろはは声を殺して泣いていた。

良かった。

伝わっていた。

確認して安心して目をまた閉じる。

次の詞も決まった。

泣くのも笑うのもっと簡単な理由でいい。

笑いたいときに笑って泣きたいときに泣けばいい。

随分と長い時間歌い続けた。
これで本当に終わり。

それにしてもやけに寒くないか？
目を開けると答えが分かった。
雪が降っていた。

いろはを見てもみるとまだ泣いている。
さっきの私と正反対だ。

『……聞いてくれてありがとう。』

ただ一言しか発せなかった。
また一つわかった。

あの時の緑の髪の少女の気持ちが。
これもいろはのおかげ。

『いつもと……違う雰囲気……で歌うとか……反則よ!!』

いろはは泣きながら笑いながら怒った。
本当に器用だと思う。

そんな彼女だからこそ私は変わったのだろう。

『雪……まで降ってるじゃない!』

『そうね。こんな暗い道でも少しは風情が出てるわ。』

『これ……渡すにはちょうど良い雰囲気よ。大事に使って……よ。』

そう言っているのは小さな包みを私に渡す。

『クリスマスには……まだ早いけど、私とあなたの絆……だと思っ
て。』

初めてプレゼントなんかもらった。

『ここで開けてもいい?』

『いいわ。』

了承を得て包みを開ける。
何が入っているのか。

ピック？

ただのピックじゃないようだ。
いろはの好きなキャラの顔をしている。

『これで……私を忘れることはないでしょう！これから……大事に
使っていつてよね!!』

忘れることはないだろう。

きつとこのピックを見るたびにいろはの笑顔を思い出すだろう。

『私からも……。クリスマスにはまだ早いけどね。』

私も包みを取り出していろはに渡す。

『……ここで開けてもいいよね？』

もちろん。

と言おうとしたが彼女は既に包装を破いていた。
まったく持ってブレない人だ。

『これは……バツクル？』

『バツクルだよ。探すのに少し時間が掛かったけどね。』

そのバツクルはいろはの好きなキャラの顔の形をしている。
なかなか見つからなかった。
だから見つけたときは嬉しかった。

『そのバツクルなら毎日付けるでしょう？そして思い出すでしょう？
プレゼントした私のことを。』

『……ありがとう。これで絶対に忘れたりしないわ。』

本当は。

2人とも分かっている。

過ぎた時間は確かに短かったかもしれない。

でも濃密な時間を共有してきたのだ。

こんな時間を忘れるはずがない。

ただ、別れが淋しいものにならないように。

最後は笑って見送れるようにプレゼントを用意したのだ。

『ここでお別れね。』

路地裏を出たあたりでいろはは言った。

今はだいぶ落ち着いたようだ。

『そうね。』

他に何も言えない。

いろはも期待してないだろう。

彼女は湿っぽいお別れは嫌だと言った。

だから私がするべきことは決まっている。

『いろは。さよなら。』

いろはが教えてくれた最高の笑顔を投げ掛ける。

『うん！リオも元気でね！！絶対にもた会える日が来るんだからね
』

正反対の道に帰っていく私たち。

お互いの顔を見ながら後ろ歩きで進んでいく。

他人が見たら奇妙な光景だ。

なにしろ2人とも笑っているのだから。

見えなくなるまでいろはを見続けてから、体を反転させて普通に歩きます。

やっぱいろはの笑顔には勝てないな。
今は。

次に会うときはもっと上手く笑ってみせる。
絶対にまた会える。

確証はないがそんな気がする。

雪はしばらく降り続きそうだ。
ということとはしばらくは寒い日が続くのだろう。
でももう大丈夫だろう。

私はもう一人じゃないから。
心の中にはいろはとの思い出が詰まっている。
これからはいつでも私は一人じゃない。

その日から私はハローキティと一緒に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9925o/>

初めての音

2010年11月24日16時34分発行